

「善人は往生する、しかし、悪人だって往生できる」「善人さえ往生できるのに、悪人がどうして往生できないのか」——命題としての違い。前者は止揚にならないが、後者は止揚になるという。なぜ？

ところで、プラトンの

場合も、ヘーゲルの場合も、弁証法は、最初に、最も単純で明快な命題(正)を立てる。それに対して、対立する命題(反)を立てる。最後に、その二つの対立する命題を、より高いところで総合する命題(合)を立てる、という形を取りました。

「生まれつき、人間は善である」。性善説を立てます(定立・テーゼ)。しかし、人間には、よく見ていると、文字通りの善人なんかいないですね。こすいのも含めて、「人間は悪である」と見た方がよほど真実に近い。性悪説が立ちます(反定立・アンチテーゼ)。しかし、定立—反定立から、「善人は往生する、しかし、悪人だって往生できる」などという結論を出しても、より高いところで、性善説と性悪説を総合した(統合・ジンテーゼ)、ということにならないことは、分かるでしょう。親鸞がいったように、「善人さえ往生できるのに、悪人がどうして往生できないのか」ということになると、これは立派なジンテーゼ、ヘーゲルの言葉でいうと、「止揚」(アウフヘーベン)になります。

・・・

つまり、正しい人間がいて、悪人がいて、そして悪も善もこきまぜた人間がいて、清濁併せ呑んだような人間が正解だ、というような、定立・反定立・統合を考えなくてもいいのです。そうじゃなくて、人間には悪の側面と、善の側面がある。しかし、善を知ろうと思えば、本当は悪の側面を知っていなければ、善が何だか分からないんだ、ということ、を、いつてるんだと考える方がベターです。非常に単純にいうと。

いつも、物事は必ず裏と表があって、その裏と表の関係が、うまくかみ合っていないければ、本当の姿にならないんだ、というのが弁証法の考え方なんです。

しかも、司馬の小説のすごさは、真言密教の「術語」(専門語)を用いずに、空海の思想を説明しているところです。思想一般の構造を述べていることです。おそらく、私など、マルクスの『ドイツ・イデオロギー』より先に、『空海の風景』にであっていたなら、ずいぶん異なった思想体験をしたように思います。

司馬の歴史小説は、古代大和朝廷以前を除いて、ほぼすべての時代をカバーしています。平安末期から鎌倉へかけては、『義経』。徳川家康が出てくるまでの天下統一を目指した信長や秀吉の時代が、『国盗り物語』。そして、天下分け目の『関ヶ原』。江戸後期、日本が「世界」と再接合する時代を描いた『菜の花の沖』、さらに、明治を生み出す起爆剤となった軍事技術の展開を活写する『花神』。それと重なるような革命ロマンの『竜馬がゆく』。それから、明治以降の日本の上昇期を描いた『坂の上の雲』というように、間断がないのです。

司馬は、そのいずれの作品でも、その時代の転換期で、一番活躍した人間を主人

公にしながら、歴史がどう変わってきたのか、あるいは、そこで生きた人間はどう考え行動したのか、ということ、非常に具体的に、分かりやすく、しかも、呪(まじな)いのごとくではなくて、どんな日本人も分かる日本語、しかも、美しい漢語リズムを残した日本語で表現しているわけです。

これを、読まない手はない。そして、面白いからすぐ読める。いま、出ている全集で五〇巻、全部合わせると、一〇〇巻ぐらいあります。一年とはいわないけども、少なくとも、どんなに速く読んでも、二年は楽しめる。それくらい読む価値はある。

牽強付会(けんきょうふかい) 都合よく理屈をこじつけること

勝つか負けるか、やってみなければ分からない。一年しか戦う力がない。自分から仕掛ける戦争ですよ。しかも、「停戦」の準備もなしに、戦争に突入してしまった。事実、軍人たちの予想通りになった。真珠湾攻撃から半年たって、ミッドウェー海戦で大敗北。それからは、後退ばかり。もちろん、停戦のチャンスをつかむ機会は訪れなかった。ちゃんとした準備もなかった。

だから、半年ちょっとやって、もう日本は負けた。それから負けっぱなし。それでも、三年半以上続いたんですよ。これが、戦争のすごいところでもあり、怖いところでもある。やめたくてもやめることができず、ずるずると焦土に向かって進むほかなかったからです。戦争、始めるのは簡単。誰でもできる。でも、やめるときのことを考えない戦争、全くの初歩的誤り。